

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境— 「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト (加藤早稲子) e-mail: sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



生活用具を火災や台風から守ってきた椎根の石屋根小屋。軒下には櫛や櫓がつる
されていて、農家が磯周りで海藻や小魚を捕っていたことを示している。

(撮影：山田悟郎)

火耕班 2009 年対馬島での研究会

山田 悟郎 (北海道開拓記念館 学芸部)

火耕班 2009 年対馬島での研究会

山田 悟郎（北海道開拓記念館 学芸部）

8月10日午後から、対馬市^{いづほら}巖原町交流センターで火耕班2009年夏の研修会が開催され、対馬の歴史・文化についての生き字引でおられる永留久恵氏、長年にわたって対馬での農業改良普及を努められた月川雅夫氏、長崎国際大学の立平進氏から、対馬の風土と歴史、対馬の林業と農業、巖原町^{いづほら}豆敷の檜ぼの遺跡などの研究成果についてお話しいただいた。翌11日には、前日の話題に登場した地域を訪れる現地見学会が行われ、陶山納庵（1657－1732年）の墓前をスタートして、豆敷（^{たぐ}多久頭魂神社・赤米水田・檜ぼの遺跡）、椎根（石屋根小屋）、檜根経塚（木庭作跡）、豊玉町仁位（和多都美神社）を巡ってきた。以下では、陶山納庵、赤米新田、対馬の木庭作についてふれてみたい。

陶山納庵

御郡奉行として対馬の農政に心血を注いだ陶山は、猪や鹿の跳梁で木庭（焼畑）や田畑の作物が荒らされて減収し、その対策で農民が苦しんでいたことを解決するために「猪鹿追詰」^{いぶかおいつめ}を行い、元禄十三（1700）年から9年を要した宝永六（1709）年春までの短期間で8万頭におよぶ猪・鹿を殲滅した。さらに、木庭作による粗放的農法を止めさせ、山畑・段畑を拓いて集約的な農法へ改めさせる「木庭作停止」を勧めたが、木庭作によった山野での粗放的土地利用がより合理性を得たようで、10年後には木庭作停止が中止されている。

月川氏によると、木庭作での猪・鹿による被害が増加したのは、木庭作の開けすぎや山荒れの進行により、①猪・鹿の生息の場が狭められ、木庭や畑への進入増加、②木庭作の増加による餌の増加、③木庭跡地に生ずる葛根・蕨根による餌の増加、により猪・鹿の繁殖増加・跳梁につながる条件がそろっていたことによる、「猪たち反乱」であるとしている。

豆酩の赤米神田

巖原町豆酩は対馬南端に位置した戸数約 400 戸の村であるが、境内社を含めて 10 の神社があり、その多くは対馬神道とも呼ばれる神と仏が融合した天道信仰と観音信仰が結びついた多久頭魂神社の境内に集まっている。赤米神事は多久頭魂神社の神事として受け継がれてきた。



赤米神田の遠景

土地の人々が「神さまん田」と呼んでいる赤米神田は、多久頭魂神社脇を流れる神田川沿いの乾田と深田の中間にあたる、対馬で「チューデン」と呼ばれるもっとも良い場所があてられている。「頭仲間」と呼ばれる集団によって赤米種粳（御神体）引き渡しや田植えなど、年間に 10 回にわたる赤米にまつわる神事が毎年行われてきたが、後継者不足や神事に伴う金銭的な負担が大きいため「頭仲間」が年々減り、今年はずいに主藤さんただ一人となって、赤米神事が存亡の危機に直面しているという。



赤米神田の北入口に立てられた忌竹と注連縄

今年は 6 月 4 日に 3 アールの神田で田植えが行われ、稲株は順調に生育していたが、現地を訪れたときにはまだ出穂していなかったことから赤い花も穂もみることは出来なかった。神田への北入口（水口）と南入口には忌竹が立てられ、注連縄が張られていて他の水田と区分されている様子がうかがえた。

対馬の木庭

対馬は平地が少なく、島の面積の89%を照葉樹林や植林からなる山林が占め、標高200～300メートルの急峻な尾根が続くことから、平地での水田・畑作地が少なく、昭和初期までは山地の六・七合目までの斜面を焼いて耕作する木庭（焼畑）が全島で開かれていた。

佐々木高明氏によると、対馬における木庭の造成は7月下旬から8月上旬頃に、直径40～50cmの樹木が茂る10～15年生程度の雑木林での伐採（コバナギ）が行われ、2～3ヶ月放置して乾燥させ、11月頃に火入れ（コバヤキ）が行われた。対馬の木庭作で注目されたのは、かつてはかなり傾斜があるところでも牛スキを入れた犁耕を行い、干鰯や海藻などを肥料として投入していることである。初年目にはおもにオオムギ（裸性・皮性）、時にはコムギが播種されたが、木庭の地味によってムギコバ・アワ（ソバ）コバの区分がなされていたという。翌年にはアワもしくはソバ、アワ・ソバを播種し、3年目には前年にソバを播いた後にはアワを、アワをつくった後には大豆・小豆あるいはメナガと呼ばれた小豆によく似た豆などが作付け、ムギーアワー豆類（豆類）あるいはムギーソバアワ（豆類）という輪作体系が確立されていた。



過去に木庭が開かれていた檜根経塚の山々

焼畑への犁耕の導入、主作物にオオムギを選択していることから、佐々木氏は朝鮮半島に類縁が求められるとしている。酸性土壌や土壌の還元状態を嫌忌するムギを主作物として選択したことが、対馬で焼畑に施肥をする慣行を早くから固定せしめた一つの要因であること、常畑高地が乏しい対馬では、焼畑の「高入れ」が早くから実施され、焼畑における生産力の確保が領主権力の側から強く求められた、社会的・経済的事情が早くから焼畑に施肥を行う慣行を生み出した第二の要因とみることができると指摘している。

2005年に韓国全州市円光大学校で開催された「東北アジアの雑穀農耕の起源と展開」という研究会に参加した際に、釜山市福泉博物館で開催されていた「昔の料理展」に展示されていた韓国の橿文土器時代から三国時代までの遺跡から出土した穀物を間近で観察することが出来た。その中に無土器時代中期（紀元前1千年紀中葉）の遺跡から出土した裸性と皮性のオオムギが含まれており、東亜大学校博物館の展示資料の中にも裸性と皮性オオムギが展示されており、

紀元前数百年前までには朝鮮半島南端まで皮性・裸性オオムギが到達していたことを示していた。朝鮮半島南端に達したオオムギは対馬、壱岐を經由して九州に達したと推定されるが、縄文晩期から弥生前期頃の九州での確実なオオムギに関する資料は極めて少なく、それが皮性なのか裸性なのかも依然不明のままである。

かつて宮本常一氏は著書『日本の離島 第2集』のなかで、「朝鮮から直接高い文化がこの島を經由してきても島民自体がこれをうけ入れることすらなく、島は単に文化をもたらす人々の中継地としてのみ存在し、そのまま九州本土へもたらされた。」と記されているが、対馬を訪れ焼畑に犁耕が取り入れられ、主作物として裸性・皮性オオムギが栽培されていたことを再認識し、佐々木氏の指摘にあるように朝鮮半島から伝播した耕作方法と播種作物は中継しただけでなく、確実に対馬に残されていたと感じることができた。

さて、対馬という言葉で真っ先に思いつくのは、中尾佐助氏の著書『料理の起源』に掲載された、対馬における粒が穂についたまま火をつけて焼く、脱穀・乾燥・加熱加工を兼ねたオオムギの穂焼きの写真である。1980年代の初め頃から北海道の古代の遺跡（8～13世紀）から、アワやキビ、皮性オオムギ、コムギなどの炭化種子が相次いで出土し始め、時には炭化物が集積された遺構から炭化したオオムギやコムギの種子とともに穂軸の出土も確認されていた。その時思い浮かんだのがオオムギの穂焼きの写真であった。収穫後に不要な稈などを焼いた可能性も考えられるが、穂焼きを終えた後に脱落した種子や穂軸を含んだ炭化物を掻き集めたものがその後土壌で埋積されたら、遺跡で確認された炭化物の集積遺構と同じ形で残るのではないかと。

フローテーションの手法が早くから発掘調査に導入された北海道では、炭化種子に関する資料の蓄積をもとに、皮性オオムギは8世紀前半頃に本州から、裸性オオムギは7世紀頃に北東アジア沿海地方から渡来してきたことが明らかになっている。今後、九州各地の遺跡からの出土例の増加によって、大陸からいつ頃どのタイプのオオムギが渡来したかが明らかになるのを期待したい。

11月13日（金）には、かつて焼畑で麦作をし、麦の穂焼きが行われていた九州の大分市で第3回焼畑サミット開催されます。多くの皆様の参加をお待ちしております。